



## あらゆる未来のために生まれてきたのだ

校長 田邊 雅也

### 冬に

「ほめたたえるために生れてきたのだ。肯定するために生れてきたのだ。」

「冬に」と題した 谷川 俊太郎 さんの詩を一部引用したものです。著作権保護の観点から、全てを掲載できませんが、この詩の中には「冬」という言葉が一度も出てきません。実りの秋が過ぎ、紅葉が終わると、景色から彩りが消える季節となり、降雪地帯では、外が真っ白になります。外は寒く、コロナ第8波とインフルエンザの同時感染拡大も予想され、自宅にいても増えるでしょう。「冬に」は、1年を振り返り、自分と向き合うのにふさわしい詩だと感じています。

さて、「今年の漢字」は12月12日（月）に、京都・清水寺の舞台で発表されます。昨年の漢字は「金」でした。東京オリンピック2020、コロナ給付金等が話題となり、「金」となりました。昨年、私は学校の様子から「アイ」を選びました。漢字は「愛」、アルファベットは「i」の一文字です。目指す学校像「子供は愛されることによってさらに輝く」の「愛」を、そして朝霞市でiPadが導入されたので「i」を選びました。今年、みなさんはどう振り返りますか。

### 子供は「I can do it!」、大人は「Let's do it!」

振り返ってみると、本校の教育は、昨年より前進したことは間違いないと思います。「できた!」と子供たちが実感できる教育活動が増えた印象をもっています。

iPadの生みの親でアップル社の創業者、スティーブ・ジョブズは、「i」に、「Individual（個）」という意味も込めました。その「i」に「できる」という「can do it!」を付け加えると、子供は「I can do it!」となります。一人一人が子供らしくできる、つまり、個別最適にできるとも考えられます。こうした多様な子供たちの学びを支えるには、学校だけでは実現不可能です。多くの保護者・地域との連携が不可欠となります。私たち大人の「Let's do it! 共にやろう」という協働が求められています。

今の学習指導要領のポイントは、「何ができるようになるか」です。昭和・平成は、教師は一斉に「何を教えるか（=知識詰め込み型）」が中心でした。強い先生が一人で教えることができました。しかし今は、教師も親も「何ができるようになるか」へ大きく転換することが求められています。子供を「主語」にした「自律と探究」のある教育活動への転換となります。

学校運営協議会をはじめ、学校応援団、PTA、おはなしの木、ぐらんばなど、地域の教育力が教育活動に取り込まれています。お陰様で、従来の座学だけでは学べないような実践的な教育活動が増えています。まさに「I can do it!」と「Let's do it!」のある教育活動です。1年を振り返ると、学校と保護者・地域が力を合わせて、「自律と探究」を目指した教育活動に着実に進んでいると感じています。

### いろいろな彩<sup>いろどり</sup>で輝く子供たちのために

教養や生き方の土台を育む「MottoSokka!」も、個別最適な学びを促す「eライブラリアドバンス」も、個人面談での保護者と教員との共通理解や連携も、子供たちを主役とする授業改善も、デジタル・シティズンシップを目指す「みんなで守ろう! 六小マイルール」なども、多様な子供たち一人一人を支える教育活動や教育環境です。

大人が与えたことを素直に取り組める子供を育てることも大切です。しかし、何度も書いていますが、さらに大切なのは、子供自身が、自ら問いを立て計画したり、自分に合った学びを選んだり、興味・関心のあることを追究したり、多様な他者と協働したりしながら、自分なりの答えや新たな価値（最適解）、ウェルビーイングを生み出していく子供たちに育てていくことがさらに大切です。彩が少なくなる冬の季節ですが、いろいろな彩で輝く自分になるよう、自分で、自分から磨けるよう自分を見つめてほしいです。

### あらゆる未来のために生まれてきたのだ

谷川 俊太郎 さんの「冬に」を読み、1年を振り返り、感じていることを書きました。詩の表現のよさに書くと、子供たちは、「あらゆる未来のために生まれてきたのだ。」あらゆる未来を拓く子供たちを育むのは私たち大人の責任です。詩のしめくりを模して書くと、「子供たちは、六小の子で、地域の子で、おまけに自律と探究のできる、有望で有能な学び手でさえあるのですから。」

慌ただしい師走となりますが、子供たちには、この冬、自分と向き合いながら振り返り、それぞれが彩のある力をつけてほしいと願っています。すばらしい冬を迎えられますように。